

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02716

研究課題名（和文）標準語普及期の地方出身作家の言語に見る標準語受容に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on the Acceptance of Standard Japanese in the Language of Local-Origin Writers during the Period of the Popularization of the Standard Japanese

研究代表者

小島 聡子 (Kojima, Satoko)

岩手大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：70306249

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：大正～昭和初期の地方出身者の言葉を反映すると思われる童話作品とプロレタリア文学雑誌の一部を用いてコーパスを作成した(未公開)。そのデータを利用して、地方出身者の用いる標準語に見られる方言からの影響等について考察した。さらに、この時期に子供向けの文体がどのように整えられてきたかについて、作成したコーパスと既存の教科書コーパスを利用し、統計的な手法を用いながら、教科書より童話の方が先に子供向けの文体を確立していた可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で作成したコーパスは、既存のコーパスには未収録のジャンルの資料を取り上げており、既存のコーパスを補完する意味がある。これらのデータを活用することで、中央における標準語に限らない多様な近代語の実態を探ることが可能となる。

当該データを用いた考察で、「気づかない方言」が近代にも見られることを示したり、子供向けの文体の成立過程の一端を示すことが出来た。近年、方言の影響や、子供の言語は注目を集めるつつあるテーマであり、今後の発展に寄与することが期待できる。

研究成果の概要（英文）：We created a corpus using selected children's stories believed to reflect the language of individuals from regional backgrounds during the Taisho to early Showa periods, as well as a portion of proletarian literature magazines.

Using this data, we examined the influence of dialects on the standard language used by individuals from regional backgrounds. Furthermore, we utilized the created corpus along with an existing textbook corpus to statistically analyze and suggest the possibility that children's stories established a children's writing style before textbooks during this period.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 近代語 標準語

1. 研究開始当初の背景

(1) 「スタンダード」をめぐる議論とコーパス

明治期以降の社会の近代化に伴い、日本語についても、様々な変化があった。例えば、書き言葉の面では言文一致運動などを通じて話し言葉に近い文体(「口語体」「言文一致体」)が形成され、一方、話し言葉の面では、既に形成されていた「共通語」的なものから「標準語」を策定しようというような動きが見られたことは知られている。これらの動きはそれぞれ独立しているわけではなく、相互に関連しており、複雑である。この時期の動きについては、多くの先行研究があるが、野村剛史(2013)『日本語スタンダードの歴史 ミヤコ言葉から言文一致まで』はこの辺の状況をそれぞれの動きを関連づけ整理してみせ、改めて近代から現代への日本語の状況に注目が集まってきている。

また、従来近代語については資料が多く残っているものの索引などが乏しいという面があったが、近年、国立国語研究所によって一連の近代語関連のコーパス(『国定読本用語総覧』(1997)、『太陽コーパス』(2005)、『近代女性雑誌コーパス』(2006)、『明六雑誌コーパス』(2012)、『国民の友コーパス』(2014))が作成・公開され、近代語の詳細な状況を解明する研究が進展しつつある。

(2) 「標準語」策定以後の状況 地方への浸透

しかしながら、これまでの研究はどちらかというところ「スタンダード」(野村 2013)が形成されていく過程に注目するもので、その後それがどのように普及したか具体的な様相は明らかになっていない部分も多い。本研究では、「標準語」や「口語体」に関する一連の動きが落ち着いた後の大正期から昭和初期を取り上げる。この時期は、書き言葉の文体が「口語体」に収れんし、また「標準語」による教育が完成しつつある、「標準語」の普及期にあたる。明治期の文学者には知識階級かつ東京出身者が多かったのに対して、この時期になると地方出身者や様々な階層の人々による創作活動が盛んになる。特に、この時期に隆盛をみる童話・童謡やプロレタリア文学の担い手には地方出身者が少なくない。このことは、「標準語」が定められ、学校教育を通して多くの人々に広められていった状況と無関係ではないと考えられる。

とはいえ、この時期には地域ごとの言語の違いは大きく、当然「標準語」「口語体」と「方言」の違いも大きかった。地方出身の人にとって「口語体」あるいは「標準語」で書くことはさほど容易なことではなく、「方言」混じりになっていた可能性は大いに考えられる。「標準語」「口語体」が全国に広まる中でどのように受容され、あるいは変容していくか、地方出身者の書いた言語を手がかりにその様相を探ることができると思う。

(3) 地方出身者の言語

上記のような観点をにらみつつ、例えば宮沢賢治の作品を分析すると、地の文にも少なからず方言の影響が見られる。また、童話のような平易な文体ではより話し言葉に近くなるためか、間投詞的なものが多く挿入されるなど、方言というより口頭言語的な特徴が顕れやすく、書き言葉の口語文体の中でも、文体差が出ることも分かっている。宮沢賢治は、ほぼ終生岩手県で過ごし東京語との接触が限定的であることが、その文体や語法に方言の影響が少なからず見られることと関係していると思われる。その観点からみると、例えば小林多喜二(宮沢賢治より7年ほど年少)は、秋田に生まれ小樽で成長し、高等教育も上京はせず地元で居続けている点で、宮沢賢治と似ているのだが、彼の作品でも、地の文に方言が混じる場合があることを確認している。例えば「ピラが貼らさっていた」(『蟹工船』)のように、東北から北海道で今も見られる方言の「さる」を用いた例が複数あるところなどである。

つまり、(1)地方出身であること、(2)東京語との接触が限定的であること、の2点は書き言葉の口語文体と「方言」との関係を見る上で注目すべき観点であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、近代の「標準語」が普及していく時期(特に大正期から昭和前期)に活躍した地方出身の作家の作品の言葉を分析することを通して、方言話者である彼らがどのような「標準語」を書いたのか、その語法の特徴と方言との関わりを探りつつ、「標準語」の受容の一端を明らかにしようとするものである。その際、地方出身者の作家の中でも、宮沢賢治のように「標準語」の基となった東京の言葉との接触が限定されている人々に特に着目し、彼らの書く「標準語」(小説の地の文など)に混じる方言的要素を分析することによって、「標準語」が地方でどのように受け入れられ、あるいはどのように変容していったか、現在の「気付かない方言」などにも通ずるような書き言葉の地方性を含む様相を見ようとするものである。

3. 研究の方法

(1) 資料の選定及び収集

本研究では、大正期から昭和初期(戦前)に刊行されたもののうち、主として童話とプロレタリア文学を取り上げる。

童話作品

童話については、既にデータ化してある宮沢賢治・浜田広介に加え、小川未明・坪田譲治の作品を新しく取り上げ、データの充実を図る。なお、小川未明・浜田広介・坪田譲治は「児童文学界の三種の神器」「児童文学の三大作家」などと称されることもある初期の童話の代表的な作家である。

プロレタリア文学

プロレタリア文学については、小林多喜二など特定の作家については『青空文庫』などに既存の電子化テキストが存在するためそちらを利用し、本研究では、新たにプロレタリア文学関連の雑誌を取り上げ、分析対象を職業作家ではない人々にも拡大する。

方言資料

方言の影響を分析するため、方言についての資料も収集する。

(2) コーパスの作成

収集した資料を電子テキストにする。また、電子化したテキストは形態素解析し、タグ付きコーパスとして利用できるようにする。形態素解析及びコーパス作成については、既存のツール(Web 茶豆、Chaki.NET 等)を利用するが、結果は逐次確認して手作業で修正することで、極力、誤解析の部分を減らすようにする。

(3) データベースを利用した分析

既存の近代語のコーパスのデータも利用しながら、作成したコーパスを用いて、大人向けの文章とは異なる子供向けの文体の成立過程について、統計的な手法も交えて分析する。

また、方言の資料も参考に、地方における標準語の揺れなどについても検討する。

4. 研究成果

(1) コーパスの作成

童話関連のデータの拡充

既存の宮沢賢治及び浜田広介のデータに、新規に小川未明『赤い船』(1910)及び坪田譲治『正太の馬』(1926)『魔法』(1935)のデータを追加し、童話作品のコーパスを拡充した。

現在の近代語に関連するコーパスは、全て大人向けの文章が主で、唯一「教科書」が入っているだけである。しかし、子供が接するのは教科書には限らない。当時は、童話雑誌等も各種刊行されるなど童話・童謡が非常に多く作られており、それらが子供の言語形成に与えた影響は少ないと考えられる。当時の中心的な童話作家の作品を収めた童話コーパスは、子供向けの文体の形成過程を探る上で重要な資料となると考えられる。

プロレタリア文学のコーパス作成

プロレタリア文学の雑誌である『プロレタリア文学』の創刊号と2号の一部をテキストデータ化した。当該雑誌には労働者の投稿記事もあり、データ化に際してはその部分を特に対象に含めている。教養層ではない人々の言語を収めたデータベースとして貴重である。但し、伏字なども多いこともあり、形態素解析等はまだ終了していない。

なお、ともにデータについては、著作権等についても確認の上、何らかの形で公開できるよう準備を進める予定である。

(2) 東北地方出身者の言語・文体

収集したテキストデータから構築したコーパスを用いて、東北地方出身の作家の語法や文体に特徴がみられるかどうか、既存のコーパス(標準語的なもの)と比較検討した。近代の標準語に関連して地域差に着目したという点で意味がある。

浜田広介・宮沢賢治・佐々木喜善の文体比較

浜田広介(山形県出身・1893-1973)、宮沢賢治(岩手県出身・1896-1933)、佐々木喜善(岩手県出身・1886-1933)という共に東北地方出身でほぼ同じような時期に作品を発表している3人の文体を統計的な手法で比較した。佐々木喜善は童話作家ではないこともあり、同時期の雑誌のデータなどに合致する部分が多いが、浜田広介と宮沢賢治はそれぞれに独自の文体的特徴があり、特に浜田広介は接続詞の頻度が高く、宮沢賢治は副詞・感動詞の頻度が高い。

宮沢賢治の標準語について

宮沢賢治の文章には、違和感のある言葉遣いが様々にみられる。そのような言葉遣いは、方言の影響が表れている場合もあるが、標準語自体の語形の変遷によって現代とは表現が異なっているという場合もある。例えば『注文の多い料理店』の序に見られる「ほしいくらゐもたないでも」という部分について、「くらい」の使い方は現代の岩手県においても見られるもので、方言が顕れた部分と考えられる一方、「ないでも」に対する違和感は、打消しの逆接仮定条件表現が現代では「なくても」に収束していることによるもので、当時はいくつかの言い方が共存していた決して特異な語形ではないことを、コーパスを駆使してデータを示しつつ明らかにした。

(3) 子供向けの文体について

近代の初期には子供向けの易しい言葉遣いのようなものはなく、「標準語」も子供向けの文体ではないが、現在では子供向けの易しい文体について共通認識があると言ってよい。そのような子供向けの文体はどのように醸成されてきたのかについて考察した。

子供を対象としている資料における接続詞の実態

接続詞は、話し言葉と書き言葉、書き言葉の中でも小説類と論説類などで文体差が出やすい部分でもあり、子供向けの文体についても接続詞の分布は一般の大人向けの文体とは異なる可

能性があると考えられる。そこで、子供向けの童話作品と同時期の国定教科書において接続詞の種類と頻度を調査した。その結果、現代の諸ジャンルでは逆接が優位なのに対して、浜田広介の作品以外では逆接が優位ではないことが分かった。子供の接続詞の習得段階を考えると、逆接が多くないことは子供を対象としていることとの関連が考えられる。ただ、童話については、作家ごとの差が大きく、童話全体の特徴は見出すことは難しい。一方国定教科書は、第二期が文語的な語彙も多く特異なものになっているが、それを除くと比較的似た分布を示し、さらに大体年代が新しくなるにつれて変化するという傾向がみられることが分かった。

教科書と童話の関係

特に接続詞に着目すると、大正期の童話作品の接続詞の使われ方は同時期(第一期～第三期)の教科書の接続詞の使われ方とは異なっており、むしろこれらの作品の発表後に使用された第四期・第五期の教科書の方が童話作品に近いことが、統計的な分析によって明らかになった。これは、教科書は当初あまり子供向けということ意識せずにつくられていたのに対し、童話は当初から子供向けであることを意識した言葉遣いをしており、その後、教科書の方も次第に子供向けの文体を意識するようになったということを示唆する。

子供の書く文章や言葉遣いについて、最近様々注目されてきているところである。本研究は、子供向けの文体がどのように作られてきたのか、「標準語」との関わりも含めその一端を示したという点で意味があると考えられる。

(4) 今後の課題

本研究では、主として作成したコーパスを利用して統計的な手法を用いた分析・考察を行った。しかし、「標準語」の受容・浸透の地域差などについては、統計的な手法だけでは測りかねるところも多く、更なる語法の精査を必要とする。また、接続詞以外にも副詞等については文体差・地域差が出やすいところだと考えられるので、そちらについても今後検討したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小島聡子	4. 巻 60
2. 論文標題 宮沢賢治資料（番外編・周辺資料） / 花巻の児童雑誌『子供の力』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報	6. 最初と最後の頁 28-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小島聡子	4. 巻 4
2. 論文標題 標準語と宮沢賢治 方言と標準語のはざままで	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『賢治学』第四輯	6. 最初と最後の頁 61-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小島聡子	4. 巻 20
2. 論文標題 「ほしいくらもたないでも」という表現について 続・宮沢賢治の標準語の語法	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『近代語研究』	6. 最初と最後の頁 437-455
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小島聡子	4. 巻 第十九集
2. 論文標題 近代の東北地方出身者の文体の統計的分析-宮沢賢治・浜田広介・佐々木喜善について-	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 197-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小島聡子
2. 発表標題 大正期地方出身作家の「標準語」
3. 学会等名 「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小島聡子
2. 発表標題 近代言語資料としての宮沢賢治童話
3. 学会等名 宮沢賢治学会春季セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中 牧郎、橋本 行洋、小木曾 智信編（論文執筆 小島 聡子）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 388
3. 書名 コーパスによる日本語史研究 近代編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------